

更衣動作を獲得したことで「できる ADL」が増加し退院後の生活に自信が持てた症例
真島 穂奈美¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 リハビリテーション部

〔はじめに〕今回、重度左片麻痺・高次脳機能障害を呈し ADL の獲得に難渋している症例を担当した。症例の特性に合わせた視覚的なアプローチの導入により更衣動作を獲得し、できる ADL が増加したことで退院後の生活に自信を持つことができたため報告する。

〔事例紹介〕年齢性別 60 代女性診断名前頭葉脳動静脈奇形、右前頭葉脳皮質下出血障害名左片麻痺、高次脳機能障害（注意障害・構成障害）現病歴 X 年 Y 年 Z 日、脳動静脈奇形の塞栓術・摘出術のため入院。Z+3 日、右前頭葉脳皮質下出血あり血腫除去術実施。Z+14 日、回復期リハビリテーション病棟へ転棟性格目標があれば積極的に努力する本人の訴え退院後の生活に自信が持てない

〔作業療法評価〕Z+71 日（更衣動作訓練開始直前の評価）身体機能 BRS：Ⅱ－Ⅱ－Ⅱ，感覚：重度鈍麻基本動作座位：静的自立・動的監視 高次脳機能注意障害・構成障害あり。MMSE：28 点，TMT-A：193 秒，TMT-B：331 秒，模写・コース立方体：実施困難 ADLFIM：72/126 点（運動 44 点，認知 28 点）トイレ：監視。動作手順の定着に約 1 ヶ月要した。更衣：着衣は上下衣ともに中等度介助。上衣は端座位・下衣は臥位と端座位を併用して実施。着衣の準備で前後，襟・袖など判別間違いあり。衣服を整えられず崩れたまま着衣を始めてしまい，着衣中に衣服が捻れても気付かずに自己修正困難。脱衣は上下衣ともに可能。発言「トイレができたから，着替えもできるようになりたい」

〔更衣における問題点 #・利点 b〕#高次脳機能障害（注意障害・構成障害）の影響により，着衣の準備から一連の動作でエラーを繰り返し自己修正が困難である

b 努力する性格であり訓練に積極的

〔目標〕更衣動作の獲得，退院後の生活に自信を持てるようになる

〔更衣動作の治療プログラム・介入経過〕1. セラピストの口頭指示と徒手誘導のみのアプローチ（Z+72～76 日）着衣の準備・着衣中ともにエラーを即時的に修正するも，エラーは減少せず動作定着困難 2. 手順表を用いた視覚的なアプローチ（Z+77～85 日）本人の目線から撮影した写真で手順表を作成し，訓練時間に着脱手順を確認。訓

練時間以外は手順表を自室に掲示し、繰り返し見て復習していた。半袖・ズボンの着衣が可能になると、長袖・靴下などの他の課題にも自ら取り組んでいった。

〔最終評価〕X+85日（変更点のみ記載）高次脳機能 TMT-A: 200 秒, TMT-B: 223 秒, コース立方体: 7 点 ADLFIM: 82/126 点（運動 54 点, 認知 28 点）更衣: 衣類の出し入れに介助を要すが, 上下衣ともに着脱可能発言「着替えもできるようになり, できることが増えて自信がついた」

〔考察〕今回, 重度左片麻痺・高次脳機能障害を呈した症例の更衣動作に対して, セラピストの口頭指示と徒手誘導のみでは動作定着が困難であったが, 手順表を用いた視覚的なアプローチを導入したところ, 短期間で更衣動作を獲得することができた。症例は高次脳機能障害の影響により, 着衣の準備を含めた一連の動作においてエラーを繰り返しており, 即時的な修正では動作定着が難しかった。これに対し, 症例の目線で撮影した写真が掲載された手順表を用いた視覚的なアプローチを行ったことで, 写真を真似しながら着衣の一連動作をエラーレスに訓練することが可能となり, これが着衣動作獲得に寄与したと思われる。また, 手順表は自室に掲示できる利点があり, 訓練に積極的な症例にとって復習時間を確保できる方法となり, 短期間で動作定着に繋がったとも思われる。

症例は, 更衣動作を獲得し「できる ADL」が増加したことで, 退院後の生活に自信を持つことができた。Andrea は作業療法のプロセスとして, 自らの能力に自信をつけ, 将来への希望の基礎を固める援助が重要だと述べている 1)。今回, 更衣動作の獲得を図ったことは, 症例にとって自らの能力と退院後の生活に自信を付ける機会となり, 作業療法の重要なプロセスを実践できたと思われる。

〔参考文献〕1) Gary Kielhofner (山田孝・監訳): 作業療法実践の理論. 医学書院, 東京, 2014.